奈良市中心地域における、観光産業の問題点とその解決についての提言

教科・領域教育専攻
社会系コース　　指導教員　山本　準
大西　翔太

本論は、奈良県の特に奈良市中心地域（東大寺、興福寺、奈良公園を中心とした観光地域）の観光の現状について分析し、その課題を考察する。また課題解決に向けた視点を提示する。

第1章では観光とは何か、その歴史的展開と、現代における観光の定義と概念を確認した。観光とは決して新しい概念ではないが（古くから物見遊山などの活動を中心に存在していた）、その確固たる定義が世界中で共有されたのは1960年代以降のことである。国際的な観光の潮流は世界的に好景気に沸いた1920年代に勃興するが、直後の第二次世界大戦によってそのブームは閉ざされてしまう。しかしながら1960年代に再び沸き上がった観光の潮流がもたらした経済効果は大きく、各国がその正確な経済規模を統計調査するために、国際的な定義と基準を必要とした。我が国でも国際的に定められた定義と基準に則して、観光庁が観光に関する定義づけを行っており、統計方法も公表している。本論文で提示する観光に関する統計資料はこの統計方法に則っている。また観光の構成要素である「観光地点」と「観光入込客数」の定義についても確認している。

第2章では奈良県の観光産業の現状と課題について分析、考察を行った。奈良県の観光における一番の問題点は宿泊に関する問題であり、宿泊施設数、室数ともに全国でも最下位近辺に甘んじるほどである。では何故観光を主産業としているにもかかわらず、このような現状が存在しているのか。奈良県の近隣の大都市（大阪・京都）との位置関係やアクセスの現状を明らかにしつつ、宿泊施設の絶対数が少ないことによる悪循環、奈良観光に要する時間の短さ、奈良県下の飲食店の店舗数の少なさなどの視点に立って分析、考察を行っている。また奈良観光の現状として、本論の研究対象地域である奈良市中心地域に点在している観光資源についても分析を行っている。奈良市の観光資源の最たるものは古都を構成する歴史遺産物であり、東大寺や興福寺、春日大社を中心に点在している。これらの観光資源は2㎞四方という、非常に限られた狭い地域に密集しており、奈良観光の時間の短縮の大きな要因となっていることが指摘できる。また県外の奈良観光に対するニーズについても分析し、その多くが奈良市中心地域に観光に訪れたいとしているものの、それと同水準で県中部や県南部の自然観光に訪れたいとしていることもわかった。これは奈良市中心地域の観光整備を進める奈良県の方針とは若干の認識の隔たりが生じていると考えられた。

第3章では第2章を踏まえて、奈良県の抱える観光に関する課題に対して、県や市の自治体がどのような戦略をとっているのか分析、考察を行った。それぞれ交通インフラ、情報インフラ、宿泊支援、飲食の四つの視点に立って分析を行った。交通インフラに関する戦略では、奈

良観光における観光客のニーズから導き出される動線について注目し、その動線に則った交通整備を分析している。交通会社と協力し、自治体が整備する観光客向けバスである「ぐるっとバス」や、奈良観光における歩行者の増加、安全確保の為に執り行われている歩道整備事業について考察した。情報インフラに関する戦略では複雑になりがちな奈良の観光資源をどのように観光客に発信していくのか、自治体や観光協会が行っている取り組みについて考察した。特に観光案内所や、案内所内のさまざまな設備に着目し、タブレット端末を使った観光情報の発信の取り組みについて分析を行った。しかしながらこの取り組みも万全とは言いがたく、必ずしも現状にマッチングしていない細やかながら無視できない課題も散見された。宿泊支援と飲食店に関する戦略では奈良県が行っている各種融資や規制緩和について触れ、観光中心地域である奈良市との連携の曖昧さについて指摘した。

第４章ではこれまでの章を踏まえて、奈良の取り得る新しい観光戦略について考察した。周回型観光という、観光滞在時間を延長させるための観光の在り方について考え、それを達成するための観光地づくりである「観光」まちづくりの概念について確認した。「観光」まちづくりとは行政と地域住民が一体となって、地域の活性化を志し、まちそのものを魅力ある観光地として整備していく活動である。

本章ではこの「観光」まちづくりの概念に則してまちづくりを行ってきた由布市と長浜市について分析を行った。由布市は温泉地として有名であるが、その歴史は決して長くはない。それでも地道な景観保護とまちの整備、地域住民の積極的なまちづくりへの参加などを経て一大観光地として成長していった経緯がある。長浜市も歴史遺産物を観光資源として改修整備し、衰退していた商店街通りを歴史遺産物に触れることの出来る博物館通りとして再開発し、行政と地域住民が一体となって観光地をつくりあげた。

奈良市中心地域も「ならまち」という由布市と長浜市が有する観光地域によく似た地域が存在し、当該地域の「観光」まちづくりの可能性について考察を行っている。観光地としての観光客への観光資源の紹介や、まちの機能整備では由布市や長浜市に及ばないものの、観光地としての可能性は二つの地域に比肩するものがあった。地場産業を観光資源化するために有用な「なら工藝館」が整備され、官民問わず様々な観光イベントが開催されてもいる。しかしながらまだ行政と民間の連携の余地は残されており、「観光」まちづくりに成功した様々な地域の事例を参考にまちづくりを行っていく必要があることを指摘した。

本論では奈良市中心地域における「観光」まちづくりの可能性について着目した。しかしながら昨今の観光ではインバウンド（外国人観光客）観光やエコツーリズム（自然体験観光）などさまざまな形態の観光が注目され、その可能性は幅広い。本論はそうした新しい観光形態についての考察の余地が残されており、まだまだ観光研究は奥深いということを認識させられた。そのため、これからも奈良における地域住民の一人として奈良観光の在り方について考えていきたいと思う。また教育に携わるものとして、観光を通じた地域教育の手法や意義についても考察し、生涯を通してこれからの世代にその地域の素晴らしさが伝えられるよう、努めていきたいと考える。